

# ブラジル特報



No.1655  
2020年3月号

## 特集 ブラジルのスタートアップ・パワー

- ・ブラジルのスタートアップエコシステムの魅力
- ・社会課題を解決するブラジルのスタートアップ

あの町この町  
ジュイス・デ・フォーラ Juiz de Fora

0円

新規会員募集中!  
詳しくは P21 をご覧ください。



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail [info@nipo-brasil.org](mailto:info@nipo-brasil.org)



# 360° business innovation.



## 世界の未来を、ブラジルとつくる。

### [Business innovation-1]

鉄道と港湾を一体化させ、物流を効率化。

鉄道網と港湾ターミナルの複合一貫サービスを提供するVLI社に出資参画。  
たとえばサントス北西のティプラム港で、取扱貨物を次々と拡大。

### [Business innovation-2]

貨車リースで、全土に広がる陸上輸送モデルを確立。

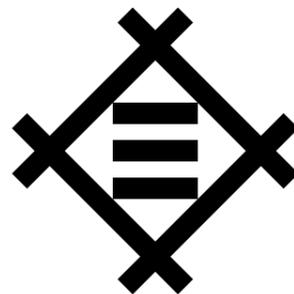
MRCLA社を通じてリース事業を展開。貨車6,000両以上、機関車20両以上で国じゅうを縦横につなぎ、穀物・肥料・鉄鋼製品・燃料などを運搬。物流の安定化に貢献。

### [Business innovation-3]

現場のニーズに細やかに応える農業事業で、農業の発展を。

オウロフィーノ社に出資参画。大規模な農地が多いブラジルで、気候条件に適した農業製剤を開発。作物の順調な生育を農業で支え、増産や品質向上に貢献。

世界の未来を、世界とつくる。三井物産



MITSUI & CO.

## 目次

あこの町この町  
ジュイス・デ・フォーラ 【佐藤宗一】 ..... 3

ブラジル・ナウ  
新興企業による社会課題解決  
~NGOとの違い~ 【竹下幸治郎】 ..... 5

【特集】ブラジルのスタートアップ・パワー  
ブラジルのスタートアップエコシステムの魅力  
【中山 充】 ..... 6

【特集】ブラジルのスタートアップ・パワー  
社会課題を解決するブラジルのスタートアップ  
【辻本希世】 ..... 8

労作『ブラジルの都市の歴史』（中岡義介、川西尋子著）を読む  
オーソドックスにしてポレミック  
【『ブラジル特報』編集部】 ..... 10

カフェジャーニョでも飲みながらする文化の話  
【アリーニ・ペレイラ・ゴンサルベス】 ..... 11

ブラジル現地報告  
注目のフィンテック Nubank  
利用者の経験から語る 【仁尾帯刀】 ..... 12

連載・日系企業シリーズ第62回  
『東麒麟』から『Azuma Kirin』へ 【尾崎英之】 ..... 13

連載・ビジネス法務の肝  
経済自由法（経済的自由権宣言） 【柏 健吾】 ..... 14

連載・税務の勘どころ  
暫定令(MP)905/2019:  
労使関係における新たなパラダイムがもたらす機会  
【ヴァルテル・シミス/吉田幸司】 ..... 15

エッセイ  
日伯友好の実り多き新時代 【エドゥアルド・サボイア】 ..... 16

ウーマン・アイ  
ブラジルを本気で楽しむ 【平松佑佳子】 ..... 17

ジャーナリストの旅路  
ブラジルの沖縄そば 【佐々文子】 ..... 17

連載・文化評論  
セラミックアートの巨匠、フランシスコ・ブレナンを偲ぶ  
モダニズムとノルデス魂 【岸和田仁】 ..... 18

最近のブラジル政治経済事情 ..... 19

キャンパス・コラム  
ブラジルの魔力 【岡崎駿輔】 ..... 19

新刊書紹介 ..... 20

連載・ブラジルあれこれ  
FIOCRUZ 薬物使用状況調査 ..... 20

協会からのお知らせ ..... 21



写真=永武ひかる  
「表紙のひとこと」  
「小学生がノートパソコンを操り、声をあげていた。ゲームができる『数学の部屋』。数年前に訪れたリオ工業連盟が運営する学校では、変わりゆく時代に、ICT（情報通信技術）が活用され、新たな学習法が進められていた。」  
（永武ひかる：ブラジル撮影約30年、著作に写真絵本『世界のともたち3 ブラジル』（偕成社）等。www.hikarunagatake.com

あの町、  
この町

## ジュイス・デ・フォーラ Juiz de Fora

仕事の関係でブラジルの6都市に住んだことがある。最初に住んだ町はミナス・ジェライス州のジュイス・デ・フォーラだ。約40年前、この町のブラジル人の家に1年下宿し、同地の連邦大学に通った。目的はポルトガル語とブラジル事情を学ぶこと。これと言った特色のある町ではないが、治安は良く、静かな落ち着いた町であり、勉強には適している。当時、私以外に、日本企業の研修生が3人滞在していた。

この町はリオデジャネイロの北方128kmの内陸に位置し、車で約2時間40分。現人口は約50万人、州都ベロ・オリゾンテに次ぐミナス第2の都市である。町の中心を走るリオ・ブランコ大通りでは町の最大イベント、カーニバルが行われる。ここで初めてブラジルのカーニバルを体験した。この大通りに面し、町のほぼ中央に、緑に包まれたアルフェルジ公園（Parque Halfeld）がある。公園のベンチに座って新聞を読むのが毎朝の日課だった。この公園から「キリストの丘（Morro do Redentor）」と呼ばれる切り立った丘が見える。丘の上には展望台と背丈3.75mのキリスト像がある。展望台から町が一望でき、その眺望は絶景である。昔この丘に上った皇帝ペドロ2世が、その絶景を堪能したことから、「皇帝の丘（Morro do Imperador）」とも呼ばれる。この町の北方約150kmには、最初のミナス州都マリアーナ、世界遺産都市オウロ・プレートがある。いずれも風情のある昔の街並みを残している。夜ここに現れる満天の星の美しさは筆舌に尽くしがたい。



ジュイス・デ・フォーラ市全景

この町の人をジュイス・フォーラノ（Juiz-Forano）という。人情味があり、「おもてなし」の心を感じさせる。例えば、ポルトガル語の家庭教師は、自分の車に私を乗せ、町中を走り回って一緒に下宿を探してくれた。下宿のおばさんは、私から日本人は毎日みそ汁を飲むという話を聞き、毎日夕食には野菜スープを付けてくれた。女中の雇用、日曜ミサ、カトリックの葬式、付き添い同伴のデートなど、当時のブラジル人の習慣もこの下宿で学んだ。因みに、この町の最も有名な人物と言えば、市長を務めたこともあるイタマル・フランコ大統領（2011年没）であろう。1992年大統領が汚職疑惑で失脚し、当時副大統領であったイタマルが大統領に就任。長くブラジルを悩ませてきたハイパーインフレが終息したのは、このイタマル政権時代だ。



キリストの丘（皇帝の丘）



佐藤宗一（協会理事）

# グローバル人材の採用なら

日経HRは、日本経済新聞グループの人材情報企業として、新卒向け就職事業、社会人向け転職事業、キャリア教育事業をメインに展開しています。

日経HR独自の情報に加え、日本経済新聞社や日経BP社のコンテンツをベースに就職活動、学び、スキルアップ、キャリアデザイン、転職などのHR (Human Resources) 情報をインターネットや出版、イベントなどのクロスメディア展開により発信していきます。

## 日経アジアリクルーティングフォーラム

2013年8月に第1回フォーラムを開催。毎年、アジア主要国のトップクラス大学で学ぶ現地学生の日本企業就職を支援。各国での企業説明会や、日本で学ぶ外国人留学生のための就職支援など、グローバル人材を求める日本企業のニーズにお応えしています。



## 日経キャリアNET

社会人のための転職サイト。日本経済新聞や日経・電子版、日経BP社の各種専門媒体を入り口としたビジネスに意欲の高い求職者と、人材を企業戦略の中核と意識する優良企業を結びつけます。



日経キャリアNET  
<https://career.nikkei.co.jp/>

## キャリアコンサルティング(人材紹介)

エグゼクティブ、金融、IT系人材を中心に、人と企業をピンポイントで結ぶ人材紹介事業を展開しています。日経キャリアNETや日経グループ各媒体との連動やアライアンス・エージェントとの連携など、さまざまなご提案も行っています。



日経HR  
NIKKEI HUMAN RESOURCES  
<https://www.nikkeihr.co.jp/executive/>

## 日経メディアで複合プロモーション

日経新聞・日経電子版、日経BP専門媒体(雑誌・Web・メルマガ・フォーラム)を活用した日経メディアの複合プロモーションで人材採用活動をお手伝いします。



仕事の先の幸せを創造する会社

**日経HR**  
NIKKEI HUMAN RESOURCES



## 新興企業による社会課題解決～NGOとの違い～

「スタートアップのおかげで生活も以前よりだいぶ便利になったよ」とはサンパウロから一時帰国した知人の言葉だ。スタートアップとは革新的な技術や製品・サービスで社会に新しい価値をもたらすことを目的に資金調達やスケールアップをし、IPOなどを目指す企業をさす。ブラジルのスタートアップに対するベンチャーキャピタルからの投資は、マクロ経済面の停滞をしり目に急増中だ。

昔も今もブラジルは課題が多い国として知られる。地方間のインフラ格差、資産・所得格差に起因する教育や医療面での格差、治安、汚職など枚挙にいとまがない。そうした社会課題の解決には、政府、NGOなどが主に取り組んできた。他方、企業に関しては、利益追求に伴う環境破壊、労働搾取、汚職など、課題を生み出す側面が指摘されることはあれ、課題解決を図る主体として認識されることは少なかった。

ところが近年、起業・ビジネスモデルを通じて社会課題の解決を目指す動きが出てきている。「企業活動で生み出された製品が売れるのは社会が必要とされているからだ」というロジックは以前から存在した。しかし、近年のスタートアップは、「世の中を変える」ビジョンを持った起業家により、社会課題をビジネスシーズととらえ、より強く意識している点で伝統的な企業と大きく異なる。教育系スタートアップによる遠隔教育、金融技術系スタートアップによる低所得者へのクレジット供与などは格差解消とビジネスの両立を実現している良い例だ。また当該スタートアップが意図せずとも副次的効果がみられるケースもある。例えば、現金を介さない配車サービスや外出せずに済む買い物代行アプリの利用により、タクシー強盗や誘拐犯罪に遭う確率を減らせることなどだ。

社会課題解決という切り口でみたNGOとスタートアップの違いは、こうした課題解決へのアプローチ以外に、組織の性質や国家との関係性についても見出すことができる。

まずは組織・業容の拡大のスピードに必要なファイナンス手段である。シェアホルダーがそもそも存在せず、利益分配ができないNGOの場合、寄付、補助金、メンバーシップなどに手段が限定され、大規模な資金調達は難しい。これに対し、スタートアップは、将来にわたってキャッシュフローを生むと投資家に評価された場合、短期間で大規模

な資金調達が可能だ。特に低金利による投資家のリスク選考が高い状況においてはなおさらである。

カナだけではない。新たなビジネスモデル誕生のベースとしてのインキュベーター施設においてヒトの交流が生まれ、新しいスタートアップの孵化・育成が行われる。つまりカナ・ヒト、場の提供に加え、専門家からのノウハウ共有により、エコシステムというベンチャー生態系があちこちで形成され、増殖するメカニズムが確立されつつある。

さらに、同じ社会課題を持つ国への横展開を通じたスケールアップも可能であり、別分野への進出など業容の多様化も容易である。他社の吸収・合併にも柔軟性を有している。

規制に関するスタンスは、NGOとスタートアップで最も異なる点だ。法・規制に沿って認可されるNGOと異なり、スタートアップは逆に、法や規制緩和のきっかけにもなりうる。ブラジルのような中所得国は、イノベーション振興を通じ、産業競争力増加、雇用機会創出、税収増加を目指していることが多い。少数企業による独占排除も健全な経済成長を目指す上では不可欠である。ブラジルの場合、金融セクターにおける競争を促し、貸出金利の高止まりを打破させるべく中銀が積極的なイニシアティブをとっているのが興味深い。金融技術革新研究所LIFTを設置してクレジット、クライアント登録情報のポータビリティ化を目指したり、規制サンドボックス(砂場)の運用を始めたたりしているのは象徴的だ。

部分的・漸進的に進められてきた国の規制緩和については、2019年11月に政令10122により、スタートアップ支援のための国家委員会が設置され、これにより連邦行政機関のスタートアップ支援に一貫性がもたらされ、関連手続きも迅速となる見込みだ。

「企業と社会」を巡って右派政権時と左派政権時で全く異なる扱いがなされてきたブラジル。しかし、以前とは全く異なるビジョン・価値観を持ったスタートアップが増えているのは確かであり、彼らが市民生活に変化をもたらしているのも事実だ。政府、市民、企業など、社会を構成する組織体間相互の関係性がより最適な解を求めて変化していく過程を今後、我々はブラジルで目にするようになるかもしれない。

竹下幸治郎(拓殖大学准教授)

# ブラジルのスタートアップ エコシステムの魅力

## ブラジルのスタートアップ の現状

近年、スタートアップ、ベンチャーキャピタル、起業家、といった言葉がニュースに登場しない日はないほど日本でも一般的になってきている。

スタートアップといえばシリコンバレーを中心としたアメリカが先進国であり、最近では中国、インドのスタートアップ業界（エコシステムという呼び方を）が日本でも注目されている。

しかし、ブラジル通の本誌の読者各位であってもブラジルのスタートアップエコシステムが近年急激に発達・充実してきているのをご存じない方々が大半ではないだろうか。

私は2012年の1月からブラジルのサンパウロに移住し、2014年からブラジルのベンチャー企業への投資事業を行っている。ブラジル・ベンチャー・キャピタルという名称で、ブラジルの地元のスタートアップ企業のうち、特に立ち上げ初期フェーズであるシード期にターゲットを絞って投資を行っている。過去に投資を行った分野はアグリテック、フィンテック、リテールテック、エデュテックなど、多岐に渡る。

ブラジルの成功した起業家達へのインタビューを『未来をつくる起業家—ブラジル編』としてまとめたり、「ブラジル・ジャパン・スタートアップ・フォーラム」として日伯のビジネスパーソンに日本・ブラジル双方のスタートアップエコ

システムの状況を伝えて、つなげるような活動も行っている。ちなみに第3回のブラジル・ジャパン・スタートアップ・フォーラムは昨年2月14日に東京で行われた。

この5年間でブラジルのスタートアップを取り巻く環境は急速に強化され、起業家が成功しやすい環境が整いつつある中で、ユニコーンと呼ばれる時価総額10億ドルを超えるスタートアップが現在12社いる。ちなみに日本でユニコーンと目されるスタートアップが5-6社と言われているので、ブラジルはユニコーンの数では日本の2倍の規模感である。

今回は日本では取り上げられることがほとんどないブラジルのスタートアップエコシステムについての概要をお話したいと思う。

## ブラジルのスタートアップ エコシステム

はじめに、ブラジルのスタートアップエコシステムが魅力的な理由を簡単にまとめてみたいと思う。

**A：ブラジルの素地の魅力× B：スタートアップ環境(特に投資環境)の充実**

Aのブラジルの素地の魅力は大きく3つに分けられる

**1. 巨大な市場：**ブラジルは人口が世界5位であるが、インターネット人口はインドネシアを除いて世界4位とい

われている。経済規模も世界トップ10、国土面積も大きいのは本誌の読者各位はご存じのところであろう。

**2.ITインフラの充実：**インターネット、特にスマー

トフォンの普及率が非常に高い。また、IT開発環境もアマゾンのAWSをはじめ、グーグル、マイクロソフトなどのクラウド開発環境が十分使えて、都市部を中心にインフラが整っている。

**3. 多くの社会問題：**新規事業の根本は「世の中の問題を解決することで対価を得ること」である。とすると問題が少ない国ほど新規事業の芽を見つけるのが難しい。ブラジルには所得・資産を中心とした格差、寡占市場による競争の排除、複雑な行政など、解決すべき課題には事欠かない

Bのスタートアップ環境(特に投資環境)の充実も大きく3つの視点で話したい

**1. スタートアップ支援体制：**ブラジルでは2010年初頭から起業家向けの各種プログラムが強化されている。ENDEAVORというNPO団体は以前から起業家のメンタリングプログラムを提供してきたし、政府主導の「スタートアップブラジル」をはじめ各種経済的サポートも充実している。起業家向けのイベントはもはやファッションと言っているほど各地で毎日のように開催されている。

**2. 投資額の増加：**ブラジルのベンチャーキャピタルによるブラジルのスタートアップへの投資額は2019年に2000億円前後に達している。ちなみに日本のベンチャーキャピタルによる日本のスタートアップへの投資額は2018年は1500億円、2019年には伸びている可能性があるが、この点では日本とそん色ない規模感になっている

**3. 超大型成功事例の出現：**投資額の増加とコインの表裏にあるのが超大型成功事例である。PagSegro、Stone Pagamentos という決済系の



中山 充  
(株)ブラジル・ベンチャー・キャピタル代表

スタートアップがニューヨーク証券取引所とナスダックに上場し、日本のメルカリをはるかにしのぐ企業価値を付けた。冒頭に述べたように未上場のユニコーン企業が12社ある中で、数十億円、数百億円の資金調達のニュースは珍しくなくなりつつある。

こうした魅力的な市場を客観的に見て合理的にアプローチできる「日本企業」がある。ソフトバンクはラテンアメリカに特化したファンドを50億ドル規模で立ち上げると発表し、実際に既に多くの投資をブラジルを中心としたラテンアメリカ各地で行っている。Wework問題で多少動きが鈍る可能性もあるが、ファンドとしてお金を集めた以上、投資を今後も続けていくのも間違いない。

アメリカ、シリコンバレーの超大手ベンチャーキャピタルであるセコイア・キャピタルは以前からブラジル市場には投資をしてきたが、この年末年始でアンドリーセン・ホロウィッツやベンチマークキャピタルといった、トップレベルのベンチャーキャピタルがブラジルに投資をし始めている。

## ブラジルの市場としての魅力

こうしたファンドの投資意向は何か。一つの大きな方向性は「販売先の市場としての魅力」である。スタートアップへ投資をする場合には投資目的の方向性が国ごとにわかれるものである。

一つ目のパターンは世界トップのビジネスモデル・市場・経営者へのアクセスを求める場合である。アメリカに投資をする多くの場合はこのパターンに当てはまるし、最近では中国への投資も同様の目的になりつつある。

二つ目のパターンはイスラエルやエストニア投資する場合には自動運転などのコアとなるAI技術やブロックチェーン技術などへのアクセスを得ることを目的として、その技術を使った製品・ソリューションの販売先はその他の国々になることが多い。

三つ目のパターンは東南アジアに投資する場合などでコストは低いがクオリティの高い労働力にアクセスをすることで自社のコスト削減への貢献を目的とする場合である。

四つ目のパターンはブラジルなどのように持っている技術・ソリューションを売る先としての市場へのアクセスを取りに行く場合である。

日本のベンチャーキャピタルや起業家がブラジルにきて驚かれるのは、市場ポテンシャルの大きさにも関わらずまだまだ競争レベルが低い、ということである。既に海外を視野に入れている投資家・起業家からすると、海外では地元のスタートアップとの競争はもちろん、アメリカや中国から進出しているスタートアップが大きなシェアを占めているなどで、実際に日本のスタートアップが進出するのは簡単ではない。しかし、ブラジルを見ると日本の技術・サービスがまだまだ売れるだけの競争優位性を十分持っているように感じるようである。

こうした市場機会の中でも日本企業に興味が高いのは「アグリテック」「モビリティ」「フィンテック」「エンターテインメント」「ヘルスケア」の5分野である。最近筆者のところにも日本企業から本体投資やコーポレートベンチャーキャピタル部門からの投資の問い合わせを立て続けに受けているが、やはり興味の対象は上記の5分野に関わることが多い。

## 農業分野のイノベーション

私はブラジル日本商工会議所のイノベーション研究会の幹事を務めていることもあり、ブラジルの日本企業向けにイノベーションエリアで興味のあることを調査したことがあるが、この中でも圧倒的に興味が高かったのは農業分野のテクノロジー「アグリテック」領域である。ブラジルの巨大な農業市場の中では特に大規模生産者の技術力や効率化は既に世界でもトップレベルではあるが、中小生産者の効率改善余地はまだ大きく、中小生産者の規模感であれば日本の農業技術が十分貢献・通用する余地があると

▼農業系ドローン



というのが最近の仮説である。

最近動きが活発な事例としては日本のベンチャーキャピタルであるドローンファンドがある。ドローンファンドはドローンや自動操縦に関連するハードウェア・ソフトウェアに広く投資するドローン専門のファンドである。

このドローンファンドの投資先でもあり、トラクターの自動走行ソリューションを提供する北海道の農業情報設計社はブラジルの農業市場に進出しており、ユーザーの大半はブラジル人になっている。2019年にはブラジルのポルトアレグレに拠点を構える農業系ドローンのスタートアップであるARPACに、ドローンファンド自らを投資をした。

日本企業はなかなか自ら先陣を切って新たなアクションを起こすのが苦手な印象があるが、一方で一度少数の成功事例が見えるとこぞって似たようなアクションを起こすことがある。

ブラジル・ベンチャー・キャピタルによるブラジルのスタートアップ投資、ソフトバンクのラテンアメリカファンド、農業情報設計社のブラジル進出、ドローンファンドによるブラジルのARPACへの投資など、少しずつ日本関連のブラジルのスタートアップエコシステムへのアプローチ実績が積みあがりつつある。そろそろ閾値を超えるタイミングが来るのではないかと期待している。逆に言えば、この数年でアクションをとれなければブラジルのエコシステムでの日本勢のプレゼンスは皆無となるかもしれない。是非読者の皆様の中からもこの機会にさらに進んだ現状把握に向けて一歩を踏み出されることを願ってやまない。



◀ブラジル・ジャパン・スタートアップ・フォーラム in 渋谷

# 社会課題を解決する ブラジルのスタートアップ

ブラジルにおけるスタートアップの動きが注目を浴びている。2018年にはブラジルで初のユニコーン企業が誕生し、ブラジルにおける「スタートアップイヤー」と呼ばれた。その動きは現在も、ブラジル政府、政府関係機関、民間企業、投資家など様々なプレーヤーを巻き込みながら続いている。ブラジルの国土は日本の約22.5倍、人口2億608万人。社会課題が山積する大国はスタートアップにとってビジネスの宝庫であり、昨今、国内外から大きな注目を浴びている。

## 2018年は初のユニコーン企業が ブラジルで誕生

筆者がサンパウロ駐在4年目を迎えた2018年頃から、ブラジルの特にサンパウロなどの都市部で、スタートアップという言葉をよく耳にするようになった。紙面には「2018, o melhor ano da historia das startups no Brasil」(2018年12月7日付ESTADAO紙)、「2018, "O ANO" PARA AS STARTUPS BRASILEIRAS」(2018年12月18日付グローボ紙)といった見出しが並び、「VC」、「エコシステム」といった専門用語がピ

ジネスの場でも頻繁に使用されるようになった。2019年1月23日付フォーブス紙では「2019: The Year of Tech Startup Exits in Brazil」の見出しと共に、2018年のブラジルにおけるユニコーン企業の誕生や、ブラジル市場におけるスタートアップ成功の可能性について報じている。LAVCA (The Association for Private Capital Investment in Latin America) によれば、中南米諸国初のユニコーン企業は、ブラジル発の配車サービス大手「99」で、2018年1月に中国の滴滴出行に10億ドルで買収された。同じ月に、ブラジル発の決済サービスプラットフォームを提供するPagSeguroが調達額約27億ドルでニューヨーク証券取引所に上場した。低所得者層向け無店舗銀行でクレジットカードも発行するNubankは、2018年10月に中国のティンセントから9,000万ドルを調達したこと(2018年10月9日付「パロール」紙)、同社は既にユニコーン企業となっていたが、これを契機にさらに注目浴びることとなった。

これらの企業が多額の資金調達ができ、現在もビジネスを拡大している背景には、ブラジルが抱える社会問題、社会

課題がある。

99がサービスを開始したのは、米配車大手のウーバーがブラジルに参入した2014年5月より前の2012年だ。ノビノピタクシー(99 Taxi)という名のタクシー配車アプリを提供し、2013年にはブラジル全土のタクシー台数の半数以上が99 Táxiに登録したとされている。その後、2017年にはライドシェアサービスも開始した。ブラジルのタクシー事情は都市によりバラつきはあるものの、おおむね問題なく利用できる。例えばサンパウロ市の場合、流しのタクシーに女性が一人で乗車してもほとんど問題はない。金額も日本と比較して各段に安く、例えば約1キロの距離で初乗り運賃込みで約10リアル(約260円、1リアル≒26円)。よってタクシーを利用する人は多い。ただ、時間帯や場所によりタクシーが拾いにくい、道路でタクシー待ちをしている最中に強盗の危険がある等の問題があり、99 Táxi利用者が増加したとされている。同社は2017年5月にソフトバンクグループから1億ドルを調達することで合意したことを発表。それ以前にも、ブラジルのベンチャー・キャピタル、米国の投資会社などから出資を受けており、最終的に滴滴出行が買収した。

ちなみにウーバーは、2014年5月、世界有数の観光都市リオデジャネイロでサービスを開始した。2014年と言えば、ブラジルワールドカップが開催された年であり、ワールドカップ開催月である2014年6月の直前、同年5月からサービスを開始した。ブラジルでは、タクシー運転手の多くがポルトガル語しか話せない事、特に都市部では渋滞が激しく、よって目的地までにかかる時間や金額が日や時間帯によって大きく変わるといった課題を解決できるとして、ユーザー数を伸ばしている。2019年12月17日



辻本希世  
(独立行政法人日本貿易振興機構(ジェトロ)  
海外調査部米州課中南米 課長代理)

付Machine紙によると、2018年9月時点でブラジル国内のウーバー運転手は60万人、2018年の同社ブラジル法人の売り上げは約37億リアル(約962億円、1リアル≒26円)で、世界第二位、米国に次ぐ規模だという。

Nubankは、鮮やかな紫色のコーポレートカラーが目立つ、2013年に設立された無店舗銀行だ。銀行口座が持たず、既存の金融サービスが行き届かない低所得者層向けにサービスを提供している。融資の可否についてスマートフォンの利用金額や自動車運転免許の罰則履歴などのデータも含めた審査を行う。年会費無料のクレジットカードを発行し、2017年10月からはヌーコンタと呼ばれる金融取引口座の取り扱いも開始した。ブラジルにおける伝統的なメガバンクでは口座を保有するだけで手数料が発生するのが一般的だが、ヌーコンタは口座保有手数料がかからない。世銀の「The Global Findex Database2017」によれば、ラテンアメリカ諸国、特にブラジル、コロンビア、ペルーでは先進国と比較して、「口座保有にかかる手数料が高額である」と言うのが銀行口座を保有できない理由の一つとして挙げられている。Nubankによれば、クレジットカードの会員数は2018年10月時点で約400万人、金融取引口座は250万人が開通している。同社のスマートフォンアプリ操作で、銀行振り込みや公共料金の支払いなど基本的な金融取引も完結できる。物理的な店舗を保有していないため、無店舗金融機関として存在感を高めている。

ブラジルの特にサンパウロと言った都市部では、最近現金を見かける機会が大きく減った。数リアル単位の小額からクレジットカードやデビットカードによるカード決済ができる環境が整っていることが挙げられるが、さらに、治安的な問題で高額な現金を持ち歩くことを嫌がる人が多い。こういったニーズに対応すべく同社は急速にユーザー数を伸ばしている。現在同社は、メキシコおよびアルゼンチンにもビジネス領域を広げている。

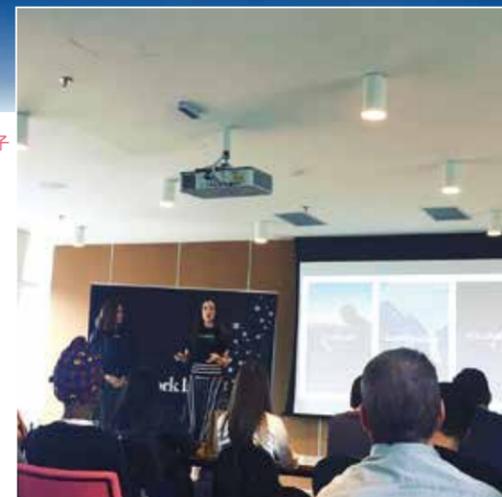
注目を浴びているブラジル発のスター

トアップはユニコーン企業だけではない。ユニコーンレベルに達していなくても技術力が高いスタートアップ、あるいはブラジル特有の課題やビジネス障壁を解決するスタートアップも注目を集めている。

## ユニコーンに限らない 高い技術力を有する ブラジルのスタートアップ企業

Predict Vision社はAIを活用して癌の早期診断を行うソフトウェアを製造販売するヘルステック企業だ。同社は、2017年に、AI立国カナダで人工知能について学んでいた電気エンジニアである日系ブラジル人のジルベルト・タカタ氏とコンピューターエンジニアのラファエル・エダー氏によって設立された。現在、ブラジル国内の病院や保険会社、医療関連大企業向けのBtoBビジネスに加えてカナダでも製品の販売を開始しており、急速に売り上げを伸ばしている。また、製品販売の傍ら、新たな製品開発にも取り組んでおり、カナダでは、オンタリオ州トロントに拠点を置く世界的なイノベーションハブ、MaRSに入居し、ビジネス拡大に取り組んでいる。

タカタ氏は、同社立ち上げに至った経緯について、ブラジルにおける医療問題を挙げる。ブラジルでは、公的医療保険として、統一保健医療システム(SUS)が1988年から導入されており、これにより国民は無償で医療を受けられるが、政府が医療機関に支払う給付額が少ないことや、対象となる病院が少ないために患者が長時間待たされるといった課題がある。同時に、サンパウロなどの都市部ではイスラエル系のアルベルト・アインシュタイン病院、シリア系およびレバノン系のシリョ・リバネス病院といった高度かつ先端医療を受けられるプライベート病院も存在する。ただ、これらの病院は高額な医療保険料を支払うことのできるいわゆる富裕層向けで、多くの国民は高度医療へのアクセスがないのが現状だ。また、ブラジルは国土が広い、遠隔医療のニーズも高い。タカタ氏は、



P8WeWorkで開催されたピッチの様子

日本でも癌による死亡率が高いことをあげ、日本でのビジネス拡大にも高い関心を示している。

ブラジルにおけるスタートアップの動きは連邦政府や民間企業を巻き込んで今後もさらに加速していくことが見込まれる。ブラジル経済省は2019年11月25日、スタートアップ企業を支援するための国家委員会の設立を発表した。ブラジル中央銀行、ブラジル国内で唯一長期融資を行うことができる、国立経済社会開発銀行(BNDES)、ブラジルの貿易投資促進機関であるブラジル輸出投資促進庁(APEX)やブラジル零細・小企業支援サービス(SEBRAE)などが委員会のメンバーに名を連ねる。また、地元メガバンクのブラデスコ銀行やイタウ銀行は、サンパウロ市内に、それぞれinovaBra habitat、CUBOと呼ばれるインキュベーションセンターを設立しスタートアップ企業向けのスケールアップ支援等を行っている。ブラデスコ銀行がWe Workと共に運営するinovaBra habitatは、テック系スタートアップと大企業が入居する。スタートアップ企業は、ビッグデータ、ブロックチェーン、AI、IoTといった分野での技術を有し既にサービスがスタートして売上が上がっていることなどが入居の条件だ。イタウ銀行が運営するCUBOにはAbstartups(ブラジルスタートアップ協会)が入居しスタートアップ企業に対する様々な支援を行っている。また、世界有数のアクセラレーターであるPlug and Playも2019年にサンパウロに進出した。

ブラジルにおけるスタートアップの動きが今後も加速しそうだ。



InovaBraのコーワーキングスペース

# 労作『ブラジルの都市の歴史』(中岡義介、川西尋子著)を読む オーソドックスにしてポレミック

「ブラジル特報」編集部



## 長年に及ぶブラジル都市研究の成果

明石書店の世界歴史叢書の一冊として今年1月末に刊行されたばかりの『ブラジルの都市の歴史』は、工学博士・地域都市計画家(中岡義介氏)と教育学博士・学校教育学研究者(川西尋子氏)による共著としては、2014年に鹿島出版会から出版された『首都ブラジリア モデルニズモ都市の誕生』に次ぐ、ブラジル都市史研究の第二弾である。

前著は、新首都ブラジリアの設計コンクール(1957年実施)で入賞したルシオ・コスタ案がモダニズムの結晶であったことを再確認したもので、原資料を渉猟した著者たちは、このブラジリアの「快適さ」を解き明かすべく、ブラジル史を再解釈し、ルシオ・コスタの知的形成史を読み解いていた。まさに理系頭脳と文系頭脳両方の複眼的視点からのブラジル版モダニズム研究の成果であった。

今回刊行された本書は、サブタイトルが、「コロニアル時代からコーヒーの時代まで」となっているように、16世紀以降の植民地時代から20世紀前半までのブラジルの諸都市の形成史と建築様式の特徴を叙述したものであるが、索引を含めると402頁といささか分厚い本なので、最初のページから読み進むと随分と時間を要することになる。

時間的余裕のない読者には、まず、著者のポレミックな主張が集約されている、最後の終章を先に読むことを薦めたい。

## ポレミックな終章

この章における著者の主張を、ごく乱暴にまとめると、いささか語弊がある物言いかもしれないが、フランスかぶれの日本人の多くが崇拝してやまない、モダニズム建築家のレジェンド、コルビュジエの代表的作品であり2016年には世界遺産に登録された「国立西洋美術館」(1959年竣工)は、18世紀の初期コーヒーファゼンダの邸宅カーザグランデの建築様式の“バクリ”にすぎない、というものだ。

確かに、写真などの資料を見比べると、素人目にも両者の類似性は明らかだ。西洋美術館の「二階に直結する外階段」が付いたファサードの雰囲気は、18世紀中葉に建設されたミナスのファゼンダ・マルチンスのカーザグランデに酷似している。また西洋美術館のピロティからの眺めと内部は、17世紀に建設されたバンデイランチ(内陸部開発隊)住宅や礼拝堂にそっくりだ。すなわち、黒人奴隷たちが建設に携わった建築物からアイデアもデザインもコピーしたといえるのだ。

著者によれば、「ル・コルビュジエの近代建築は、ルシオ・コスタが指摘したように、すでにブラジル・コロニアル時代から使われていた建築の要素を新たな造語に変え、木材や漆

喰など天然素材の原材料を鉄筋コンクリートに変えただけであった。(中略)コルビュジエのモダニズムとは、近代を象徴するものではなく、過去をリメイクしたものだといってもいいのではないか。」となる。本書によれば、1951年の論稿において、「ブラジル人のく住む機械」は、植民地時代も帝国時代も、奴隷たちとそのなかの有能な人に依存し続けてきた。(中略)カーザグランデを機能させていたのは黒人であった。」と述べていたルシオ・コスタは、自国の過去の奴隷制時代の奴隷が作り出した知的資産を冷静に評価していたのに、その師匠格のコルビュジエは、ブラジルの過去の知的資産を剽窃しリメイクしたのだ、ということになる。

## 本書の構成

主な目次を列記する。

序章「都市のブラジルへ」、

第1部「大西洋岸」、「I 低平地の大湿地開発 リオデジャネイロ」、「II 海に浸る町 サンヴィセンチ」、「III ブラジル「発見」の山と湾、川と丘 ポルトセグーロ」、「IV サトウキビ農園地帯の中心 オリンダ」、「V ブラジル植民都市のひな型 サルヴァドール」、「VI 州浜の自由都市 レシーフェ」、

第2部「内陸」、「VII 奥地と結ぶ内陸高原 サンパウロ」、「VIII 山岳のアライアル オウロプレット」、「IX 点にするファゼンダ ポンベウ」、

第3部「辺境—南部」、「X ドイツ系移民都市 イピラマ」、「XI イタリア移民都市 ヴェラノポリス」、

第4部「奥地」、「XII 日本移民都市 ウライ」、

終章「ファゼンダ」もう一つの帰結。

## オーソドックスな歴史叙述

「ブラジルの都市は個性に満ちている。すべて1500年以降に建設されたものだ。(中略)このような現状は、世界にほとんど類をみない。ブラジルの都市の経験は世界史的にも貴重な経験ということが出来る。人間環境に関する壮大な実験である。」というのが本書の序章の書き出しであるが、著者のこの基本視角に基づき、それぞれの事例を代表する都市の歴史物語が叙述されている。リオであれ、レシーフェであれ、創成期の町づくりの歴史を原資料にあたり古地図を解読しながら叙述する手法はなんともオーソドックスであるだけに、終章におけるコルビュジエ批判は読者にはとても刺激的だ。

ブラジルの都市の歴史を勉強したい者にとっては、本書は既に教科書的存在である。

# カフェジニョでも 飲みながらする文化の話



アリーニ・ペレイラ・  
ゴンサルベス  
(東京外国語大学特任講師)

## カルチャー・ショックの効用

カルチャー・ショックにとっても関心がある。新しい文化について学ぶのと同時に通常当たり前のこととして接している自分たちの文化に新たな視点を持って臨むことができる貴重な機会だと思うからだ。それに、文化の食い違いは、自分たち自身の考え方、価値観、期待や信念を考え直す良い機会でもある。

よって、ここでは、来日して1年余りを過ごしたブラジル人女性の視点から自分が経験したカルチャー・ショックについて少し書いてみる。自分は日本文化について適切な取り上げ方ができるほど日本文化を知ってはいないということに十分承知の上で自分の考えをよりよく伝えるべく最善を尽くしたい。自分の提案は、気持ちの良い午後カフェジニョを飲みながら話をするように読者と率直な会話を楽しむことである。やっとな事柄に意味付けを始めれば自分の自由気ままな視点を読者と共有できることを願っている。

## ブラジル人=真心ある人に対し 日本人の「本音」と「建前」

つい最近、日本社会にみられる二つの概念である「本音」と「建前」について知った。一般論としてこの概念につきこれまでに理解したことは、「本音」は、個人としての意図や考えのことであり、「建前」というのは、公衆の面前で、もしくはあまり親しくない人に対してとる態度のことである。

はじめは、その人の自発的個性と他人が社会に対してとる個性のギャップに驚いた。というのもブラジルにおいては、この個性のあらわれ方の差というものが小さいほどその人は誠実であり信用に値すると一般的には考えられているからだ。逆に、考えていること、感じていることとその行動の間にギャップがある人は、陰険、あるいは偽善的とみられる。そこで自分は、「相手が何を考えているか決してわからない社会でどうして生きていくことができようか。親愛や信用に基づく関係をどのようにして築けばよいのか。」と自問していた。

ブラジル人が「真心ある」人であると考えことはブラジルではごく普通である。表面的に分析しただけなら、ブラジル人は本質的に寛容で友好的な国民であるという誤った考えに至る可能性がそこにはある。しかしながら、この概念をより入念に研究すれば、歴史家のセルジオ・ブアルケ・デ・オランダは、この用語を使って、家庭内の行為を公衆の面前でのそれと分けられない、つまり私的な関係や感情をフォーマルな非個人的な環境においてより適切と思われるものと分けられない、ブラジル人の文化的困難にその他の側面とともに言及したということになる。最近日本にやってきて、しかも特にインフォーマルな地であるリオからやってきた身として、「本音」と「建前」のこのはつきりした境界を理解できなかった自分の困難は、まさにそこに起因すると考えている。ブラジルにおいて公衆の面前における振る舞いと私的な振る舞いを適合させることにある種の期待があることに鑑み、自問する「この差をなくすことは本当に可能なのか。またそれは望まれることなのか。」

## 個人的関係と非個人的関係

ある意味で、ブラジル人であれ日本人であれ個人的関係や振る舞いと非個人的環境で見られる態度との差異を無視することはできないと思う。たぶん、大きな違いは、それぞれの文化がこの違いと向き合う仕方にあると思う。日本人が「本音」と「建前」に自然に向き合うのに対し、ブラジル人は、この区別を客観的に明白に理解しそれを認めることまではできそうにない。

それゆえ、それぞれの文化が様々な関係や相互作用、合意に向けた期待について理解する仕方には相当な差がある。だからこそ、私たちはありとあらゆる興味深いカルチャー・ショックを見聞できると思う。でもその話題は、次のカフェジニョまで取っておこう。

編集部註：アリーニ先生は、UERJ(リオ州立大学)文学部、文学修士課程卒業後、PUC(カトリック大学)で外国語としてのポルトガル語教育コースを修め、その後UFF(フルミネンセ連邦大学)も卒業した臨床心理士・精神分析学者である。その多彩な才能を駆使して現在東京外国語大学の学部生と院生の教育・指導に忙しい日々を過ごしている。

## 注目のフィンテック Nubank 利用者の経験から語る



仁尾 帯刀  
(写真家)

携帯アプリの使用において、決して長けている方ではないが、それでも、各種アプリやカードの恩恵で、現金に手を触れる機会がめっきり減ったことを改めて思う。サンパウロ暮らしにおいて、私は15年以上前（あるいはそれ以前か？）から、パン屋での一杯のコーヒーからクレジットカードで支払ってきたが、Uberの普及により多くのタクシーが、またiFoodやUber Eatsなどのフードデリバリーアプリの浸透によって、頑なに現金主義を貫いてきた東洋人街の中華料理店までもがカード払いを受け入れるようになった。

単純な比較はできないが、日本ではキャッシュレス社会への移行が遅れているというメディアの情報を目にしなが、サンパウロでの私的な日常において、振り返ること数カ月、紙幣と硬貨に触れない日々が過ぎていることに、ブラジル都市部でのキャッシュレス化の速やかさを覚える。

キャッシュレス化は、携帯アプリの開発と普及によってますます推し進められており、ブラジルは携帯アプリを活用したフィンテックにおいて注目を集めている。中でも本稿で紹介するNubankは昨年、グローバル・コンサルティング企業KPMG社の選ぶ世界で最も革新的なフィンテックのトップ50で14位につけるなど、筆頭の成功例だ。Nubankは2013年に創業すると、早4年後にはユニコーン企業（評価額10億ドル以上の未上場スタートアップ）に化け、2020年1月現在で顧客2000万人を抱える金融サービスに急成長した。既にメキシコでも営業し、アルゼンチンでの開業も間近だ。

私は金融やITの専門家ではないので、このNubankについて、日本人利用者の一人としての経験を語りたい。

### Nubankの利点と欠点

銀行口座に維持費がかかるのが当然のブラジルにおいて、Nubankでは、クレジットカード、銀行口座の維持と利用に一切の手数料がかからないことをウェブのホームページで確認した後に、物は試しと、自身にとってブラジルで通算4つ目となる預金口座をこの店舗を持たないネット金融サービスに開設したのだった。

かつて既存の大手銀行で口座を開いた際には、銀行支店の個人口座担当者の面前で、身分証明書（RNE）と納税者番号（CPF）に所得明細と住居証明を揃えて提出する必要があったのだが、Nubankでは携帯アプリ上で、口座開設の手続きが完了した。



©Nubank

所得と所在地は自己申告で、納税者番号はネット上で記入、そして身分証明書は番号を記入の後に、原本を手にした“セルフイー”を撮影、送信して手続きは完了した。審査に要したのは数時間で、デビットとクレジットが一体となったカードを受け取る前にすでに、アプリ上のオンラインカードの番号（実物のカードとは別の番号）で、ネットショッピングが可能となった。

二週間後に、郵送でカードを受け取ると、日々の支払いを勇んでNubankで行ってみた。クレジットカードの月間使用限度額は、初期設定で2,700リアルであったが、使っていくうちに履歴に見合った限度額増加の設定が可能となった。また利用額のうち希望する金額をいつでも先払いできるので、限度額に達することが避けられる。高額な買い物には限度額の一時的引き上げも可能だ。

支払先の問題から、防犯対策として、カードの使用を一時停止されたことが一度あったが、アプリ上のチャットでの迅速な対応により不信感を抱かせなかった。個人的な経験からだが、ブラジルの既存の大手銀行にこのような速やかな対応は期待できない。

さて、Nubankの預金口座（NuConta）及びデビットカード機能について、私の思う主な利点を述べよう。1つ目には他行口座への振り込みに対して手数料がかからないことだ。また他行口座からNubankへの振り込みも、アプリで発行する振り込み用紙を利用することで、インターネットを通じて手数料無しで行える。そして2つ目には、ポウバンサ口座がないものの、普通預金口座の残高に対して、ポウバンサ以上の利率の利子が日々付加されることだ。

逆に欠点を挙げるならば、1つ目には海外送金を受けられないこと。個人事業主であれば、法人口座も開けるのだが、海外からの業務を受注する場合に、従来の銀行に法人口座を持たざるを得ない。2つ目の欠点は、口座から直接現金を引き落とす場合に、Banco 24 Horas（複数銀行と提携するATM）で行う必要があり、一律6.50リアルの手数料がBanco 24 Horasから徴収されることだ。

### 留学生に勧めたいサービスなのだが

以上をもって、日本人ビジネスマンがブラジルで個人口座を開設する場合には、未だ、一つは既存の銀行に開けるべきだろうが、ブラジルで決済するクレジットカードが必要な場合に、Nubankは一つの選択肢になりそうだ。アプリの操作性において、従来の銀行のアプリをしのぎ、個人的にはセキュリティ面での問題も感じていない。イノベーションで評価されている企業なので、今後のサービスの改善と新設に注目していきたい。

本来ならば1、2年間という滞在期間と、極力出費を抑えたい立場であろう留学生、研修生に勧めたいNubankだが、あいにくこれを利用するのに不都合な外的要因が存在する。それは口座開設に不可欠な、連邦警察による外国人身分証明書の発行に申請から半年～9ヶ月程度の時間を要するということだ。

フィンテックという先端産業での躍進を誇るブラジルではあるが、お役所仕事や諸々の“ブラジルコスト”が依然足かせとなるのが残念だ、ということをおちとして本稿を締めくくりたい。

## 『東麒麟』から『Azuma Kirin』へ

尾崎英之  
(Azuma Kirin 代表取締役社長)



### Azuma Kirin の設立

当社はブラジルにおいて、『東麒麟（あずまきりん）』ブランドの清酒、『AZUMA（あずま）』ブランドの醤油、味噌、調味酢等の製造販売、および『弥勒米』ブランドの米の輸入販売をしている。

当社のルーツは、三菱財閥の三代目の岩崎久弥が現在のカンピナス市に所在する東山農場を1927年に創設したことに始まる。同農場内において、1934年11月15日に社名をカンピナス農産加工会社として酒造りを目的にスタートした。

1908年に最初の移民船笠戸丸がブラジルのサントス港に到着し、当初の移民は契約移民として就労し、コーヒー農園等で働く彼らの生活は大変厳しく過酷なものであったと言われており、農園等の生活は楽しみもなく、飲酒する場合には当時の品質の悪いピング酒（砂糖黍を原料とした蒸留酒）であり、身体を壊す移民も多かったとのことであった。そこで日本人のためのお酒は日本酒である、との考えのもと、日本人移民のために良質な清酒を作ることを目的に当社が設立された。

日本から醸造機器を持ち込み、日本人の醸造責任者のもと、1935年に清酒工場が完成し、同年には清酒「東麒麟」の販売を開始した。戦前や戦後においても、日系コロニアの結婚式やイベントなどははれの機会や、当時にサンパウロにあった料亭や日本食レストランなどでは、当社の清酒が飲用されていた。しかしながらブラジルにおける酒造りは、当初は困難の連続であった。日本において、日本酒は寒仕込みとよばれ寒い時期に酒造りが行われるが、ブラジルは気候的に熱帯に位置しており、この環境の中でどのように清酒の発酵をコントロールするかは、当社醸造技術者の大きな課題であった。

日本から醸造機器を持ち込み、日本人の醸造責任者のもと、1935年に清酒工場が完成し、同年には清酒「東麒麟」の販売を開始した。戦前や戦後においても、日系コロニアの結婚式やイベントなどははれの機会や、当時にサンパウロにあった料亭や日本食レストランなどでは、当社の清酒が飲用されていた。しかしながらブラジルにおける酒造りは、当初は困難の連続であった。日本において、日本酒は寒仕込みとよばれ寒い時期に酒造りが行われるが、ブラジルは気候的に熱帯に位置しており、この環境の中でどのように清酒の発酵をコントロールするかは、当社醸造技術者の大きな課題であった。

### キリンビールの資本参加

三菱（岩崎家）より、三菱グループに所属するキリンビール社に清酒の品質向上に向けての資本参加の依頼あり、またキリンビール社は当時、ブラジルのビール市場への進出を検討しており、両者の思惑が一致し、キリンビール社は1975年に当社に資本参加した。

キリンビール社の技術や資本を投下し、新たな清酒工場を建設すると同時に、清酒や醤油および味噌造りについては秋田の酒造会社などからも技術支援を受けて、清酒や和食調味料の品質改善に努めてきた。かつては、『あたまきりん』、飲

むと頭が痛くなると言われ、揶揄された『東麒麟』であったが、1985年には微生物管理や温度管理が困難な生酒の販売開始するなど、清酒や和食調味料の品質改善を進めてきた。

### サケピリーニャブーム

1980年代後半よりブラジルにおいても和食が人気となり当社の清酒の販売も徐々にではあるが増加してきた。特に2000年代に入ると、ブラジルの国民的な酒ともいえる砂糖黍原料のピング酒に替えて、清酒とブラジルの多様なフルーツをミックスしたドリンク“サケピリーニャ”が、当地で大ブームとなった。当社も市場の需要にこたえるべく2003年には新たな清酒工場を増設し、さらに翌年には製造能力を倍増するなど、増産体制を整えた。

今ではサケピリーニャは日本食レストランに限らず、ブラジルの街角のBarでも普通にメニューの載るようになるなど、ポピュラーな飲料になっている。

### ブラジルにおける清酒の拡がり

日本では国内の日本酒消費量は減少傾向にあるが、グローバルな和食の広がりから、海外に向けての輸出は過去10年間で2倍ほどにも増加している。ブラジルにおいても同様の状況は見られ、日本からの日本酒輸入は2011年から2019年の間に数量ベースで2.5倍ほども増えている。輸入日本酒に加えて、当地ブラジルで製造する国産清酒のブランドも増えてきている。中には、醸造酒なのに蒸留酒と記載されたり、若干品質を疑うような国産の清酒もあるが、確実にブラジルにおける清酒市場は広がってきている。

### 当社役割

ブラジルにおいては日本人移民の方々が築かれた100年以上の歴史があり、ここで和食文化が定着しブラジル人の生活になくてはならないものとなっているのは、この日本人移民や日系の方々の努力の結果と思う。

当社は86年前の創業より、この日本人移民や日系の方々とともに、清酒や醤油、味噌、調味酢などの製品の提供を通じて、ともに発展してきた。

今後も日系社会はもちろん、ここブラジルにおいてしっかりと根付き、多様な進化の兆しを見せ始めている和食文化のさらなる発展に、これからも貢献していきたいと考えている。



▲東麒麟の現商品写真

# 経済自由法(経済的自由権宣言)



柏 健吾  
(TMI 総合法律事務所  
日本法弁護士  
現在ブラジルで勤務)

## 1. 経済自由法の目的

2019年9月20日、経済自由法(2019年法13874号。原題はLei 13.874/2019 Lei da Liberdade Econômica)という新しい法律が成立し、同日から施行された。同法は、ブラジル経済の活性化を目的としており、新規ビジネスの開始の容易化や自由な事業運営の保障等に関する新たな制度が設けられた。同法1条で経済的自由権が宣言され(Declaração de Direitos de Liberdade Econômica)、同法2条では、同法の基本原則が、(1)経済活動の自由の保障、(2)公的手続きにおける当事者の信義誠実、(3)経済活動に対する公的機関の介入の抑制及び(4)行政機関に対する民間企業の脆弱性の認識の4つであることが規定されている。同法は、民法、会社法、労働法等の幅広い分野に改正を加えているが、一部の条項については、税務に関する事項及び金融に関する事項については適用されない(同法1条3項)。以下、主要なポイントについて解説する。

## 2. 行政手続きに関する事項

経済自由法の目的の一つが行政手続きの簡易化や明確化である。経済活動に具体的に影響のある主な点は以下である。

手続きの簡易化	<ul style="list-style-type: none"> <li>ローリスクと認められる事業について、公的機関の許認可等の取得が不要になる(現時点では、どのような許認可等が不要になるのかは明確ではない。ローリスクと認められる要件はRESOLUÇÃO N° 51, DE 11 DE JUNHO DE 2019に規定されている)</li> <li>公的機関に登録されている情報は、システム上連携している他の公的機関に自動的に同期される(現時点でもそのような連携をしている公的機関もあるが今後かかる連携が増えることが見込まれる)</li> </ul>
手続きの明確化・経済活動の自由の保障	<ul style="list-style-type: none"> <li>同種の手続きは同様に扱う(前例に従う)ことが明記された</li> <li>行政手続きにおける審査期間が告知された場合、当該期日中に行政機関から審査についての返答がなければ行政機関による承認があったものとみなされる</li> <li>行政規則の適用に関して、行政による権限濫用となるような行為(新規参入妨害、不必要な技術的要件の要求など)の禁止</li> <li>連邦レベルの規則を変更する際には、事前にその影響の検証が行われる</li> </ul>

## 3. 会社の運営に関する事項

まず、大きな改正点として、株主が1人で足りる法人形態が認められたことが挙げられる。ブラジルの法人形態の多くはSociedade Limitada(日本の合同会社に類似する形態)かSociedade Anônima(株式会社)であるが、いずれの形態も株主が2人以上必要であった。経済自由法により、Sociedade Limitadaの場合、株主が1人で足りるこ

とになった(Sociedade Unipessoal Limitadaと言われる)。なお、EIRELI(Empresa Individual de Responsabilidade Limitada)という法人形態が従前から存在し、同形態は株主1人でも足りたが、法人が株主になれるか否かについて従前議論があり、また、最低資本金の規定があることなどからあまり利用されなかった。

次に、法人格否認の法理についてのルールが明確化された。ブラジルにおいては、法人格否認の法理に基づき、会社の債務について、株主や役員が責任を負わされることが少なくない(特に労働債務)。これは、法人格否認の法理の根拠法である民法が、「法人格が濫用された場合」又は「法人格が混同されている場合」に役員や株主が責任を負うとしか規定しておらず、どのような場合に、濫用や混同に該当するのかについて裁判所の裁量の幅が広がったためである。経済自由法は、法人格が否認される「濫用」と「混同」の定義を設けるとともに、株主又は役員が責任を負うのは、株主又は役員が直接又は間接に当該行為から便益を受けていた場合に限定した。

## 4. 公的機関による私的活動への介入の抑制に関する事項

契約の解釈について当事者間で疑義が生じた場合、最終的には裁判で解決することになるが、その解釈は、裁判所の裁量に委ねられる。その点について、経済自由法は、裁判所は、契約の解釈については、可能な限り契約の文言に忠実に行うことを明記した。これにより、裁判所による恣意的な解釈が抑制されるとともに、契約の文言の重要性がより高まったと言える。

また、法律行為の解釈について、法律行為後の当事者の態度・慣習・伝統・マーケットプラクティス、契約書のその他の条項から何が当事者にとって合理的かなどを考慮して判断されることも新たに規定された。これにより、裁判所の判断が当事者の意思や実務からかけ離れたものになることが少なくなると考えられる。

## 5. 労働法に関する改正

労働法に関する改正の一つは、労働時間の管理についてである。労働時間の管理については、これまで従業員が10人未満の会社のみ免除されていたが、これが20人未満に変更された。さらに、労働者との個別合意又は労働組合との労働協約があれば、労働者の人数にかかわらず、所定労働時間以外の時間のみ管理することも可能となった。

また、従業員の給与や社会保障などに関する情報を管理するシステムであるeSocialが廃止され、今後新たに創設されるより簡単なシステムに移行することになった。

# 暫定令(MP)905/2019: 労使関係における新たな パラダイムをもたらす機会



ヴァルテル・シミズ 吉田幸司  
(KPMG サンパウロ (KPMG サンパウロ  
事務所 (KPMG サンパウロ  
パートナー) 事務所  
パートナー)

## ボーナスの支払いに関する新ルール

従来、ボーナスに対するINSSを免除するためには、次の基準を満たす必要があった。

- 期待以上の業績を上げたことに対する対価であること
- 従業員との間で事前に合意されたものでないこと

この基準をみとすことが難しく、業績評価によるボーナスは、多くの場合、INSSの対象となっていた。

MP 905/2019によって改正された新たな規定では、ボーナス支給のための明確な目標設定がなされ、それが従業員と事前合意されたものであり、その目標を達成した場合のボーナスに対するINSSは免除が認められるようになった。さらに、現金以外にサービスまたは物品といった形でのボーナス支給が認められるようになり、ボーナスの支払方法の幅が広がった。

## 利益分配(PLR)に関する新ルール

利益分配に関しても規定が改正された。ブラジルでは、利益分配は法令10.101号/2000により、どのように利益分配を実施すべきかが規定されていた。法令上、利益分配は労働組合によって承認される必要があり、さらに利益分配は従業員に対して一律のものでなければならぬと規定されていたが、以下の通り当該ルールが大幅に改正された。

労働法の改正で労働組合の参加は義務でなくなり、利益分配プランは雇用者及び従業員による合同委員会によって決めることが可能となった。また、従業員のカテゴリごとに特定のルールを設定するなど複数のプランを定めることが可能になり、企業が従業員の貢献度合いに応じた利益分配を行うことで従業員のモチベーション向上の一環としての利用がしやすくなったと言える。

ブラジルの労使関係の構造改革を行う法律改正がここ最近実施され、これらの改正はブラジルコストの1つでもある労働コストに影響するものと言える。

当該法律の変更を受けて、企業は従業員のモチベーションを向上させるような制度の導入や労働コストを引き下げようとする制度を導入することで企業の競争力を強化する可能性があるだろう。

なお、当該法律は現時点(2020年1月末時点)では暫定令であり、法律が施行されてからの有効期限が120日と定められている。そのため、現状では、当該法律は2020年3月中には効力を失うことになるため、現在国会にて当該暫定令の法律化に向けて議論がなされているところである。

ブラジルでビジネスを行う際の頭の痛い労務問題の改善につながる期待される当該法律が一般法となって施行されることを祈るところである。

ブラジルの労使関係は、労働法(CLT)が制定された1940年代以降、この3年間の間に大きな変化が生じている。この変化が生じている理由として、2017年に労働法が改正されたことにより、集団合意への法的効力の付与、各企業の実態に沿った形でのフレキシブルなルールの作成が認められたこと、また、経済的自由化法により更に柔軟な労働環境が認められたことなどが挙げられる。

最近では2019年11月11日に暫定措置令MP 905/2019“Trabalho Verde e Amarelo”(緑&黄色雇用契約)が交付された。この暫定措置令によって、例えば以下のようなことが定められている。

- 新たな雇用契約形態“Verde & Amarelo 雇用契約”の制定
  - ボーナスの支払いに関する新ルール
  - 利益分配(PLR)に関する新ルール
  - 理由なき解雇の場合のFGTSペナルティーの政府への支払い分(10%)の免除
  - 週休日の弾力化(日曜日以外の日も設定が可能) など
- 今回は、特に重要と考えられる“新たな雇用契約形態”、“ボーナスの支払いに関する新ルール”及び“利益分配(PLR)に関する新ルール”について説明したい。

## 新たな雇用契約形態

“Verde & Amarelo 雇用契約”はブラジル人の若年層が最初の勤務先を得られる可能性を高めることを目的に制定され、当該雇用形態の概要は以下の通りである。

- 月給上限が最低月給の1.5倍(2020年度は1,558リアル(約375ドル))
- 就業経験のない18歳から29歳までの若者を対象
- 当該形態で可能な採用人数は2019年1月から10月までの平均従業員数の20%まで(なお、細則(省令905号)にて詳細が定められている)
- 最長2年間で契約終了後は、企業の判断により通常の雇用契約への切り替えが可能
- 2022年度まで適用可能
- 勤続期間補償基金(FGTS)(通常8%→2%)及び社会保険料(INSS)(通常26.7-28.7%→1-3%)の大幅な削減
- 解雇時のペナルティーを半減(40%→20%)
- 労使間の合意により、有給休暇手当及び13ヶ月目給与を分割して月々の給与に含めることが可(従業員側のメリット)など

就業経験のない若者を採用する際に企業にはリスクがあると考えられるが当該制度によってそのリスクを軽減できる可能性があるといえる。

# 日伯友好の実り多き新時代



エドゥアルド・サボイア  
(駐日ブラジル全権大使)

1年前に着任してまもなく、日本ブラジル中央協会より「ブラジル特報」誌に寄稿する機会をいただきました。このたび重ねて貴誌の読者の皆様にご挨拶し、大使館と貴協会のゆるぎない協力関係を確認できて光栄です。

大使館と貴協会との友好関係は、ブラジルと日本の幅広いダイナミックな関係を象徴しています。2019年には、ジャイル・ボルソナーロ大統領と安倍晋三総理大臣が、両国政府の優先課題における二国間関係の重要性を明らかにしました。ボルソナーロ大統領はG 20 サミットと天皇陛下の即位礼正殿の儀の際に訪日し、両首脳は1年間に3回も相まみえました。

日伯の関係強化に資する要素は両国政府の良好な関係だけではありません。ボルソナーロ政権が最初の1年を成功裏に終えたことで、経済的連携の可能性がよみがえりました。政府の改革アジェンダの実施によってブラジル経済は活性化しています。2019年に年金改革を承認し、各国が直面する年金改革の課題に分別ある巧みな方法で取り組みました。これにより、わずか10年間で22兆円相当を節減し、公的債務のプロフィールを均衡のとれたものとすることができます。また、経済的自由権宣言を承認して企業経営を脱官僚主義化し、さらに税制改革、連邦協定の再編、公共行政の近代化といった重要案件を議会に提出しています。一方、コンセプションおよび民営化計画では2.5兆円以上を調達しました。

のみならず、政府は数十年におよぶ交渉の末に、メルコスールと欧州連合との自由貿易協定およびメルコスールと、スイス、ノルウェー、アイスランド、リヒテンシュタインからなる欧州自由貿易連合(EFTA)との自由貿易協定を締結しました。また、韓国、シンガポール、カナダといった重要なパートナーとの経済協定の交渉も前進しています。

目下の経済展望はGDPの成長、インフレの安定、歴史的に低レベルの金利と、経済指標はブラジルの前途を明確に示しています。成長の回復にともない、海外直接投資にも顕著な増加がみられました。ブラジルは景気後退がもつとも厳しかった2015、2016年にも、世界のなかでつねに

直接投資受入国の上位10か国に入っていました。2019年には世界中でFDIのインフローが低下するなか、ブラジルでは26%の伸びを記録したことは注目に値します。

ブラジルの伝統的パートナーである日本は、ブラジル経済の開放と成長の新時代のなかで特別な地位を占めます。百有余年におよぶ人的絆と歴史的な友好関係のゆえだけでなく、なによりも、日本にとってブラジルが戦略的に重要だからです。ブラジルは米国とEUに次いで世界第3位の農業輸出国です。エネルギーマトリックスの転換に取り組む日本にとり、電力マトリックスの82%を再生可能エネルギーが占めバイオ燃料で豊富な経験を有するブラジルは、同盟国として傑出しています。

ブラジルはまた、日本の投資家に高い見返りの機会を提供し続けています。電力セクターでは、2020年に国営電力会社(Eletrabras)の待望の民営化がひかえ、これにより同社の事業の拡大が可能となります。ブラジルの新たな天然ガス市場の開放は投資家の信頼を高め、石油・天然ガスセクターでは外国の参加がますます増え、なかでも中国系企業が抜きんできています。日本がブラジルで伝統的に存在感を示す鉱業セクターでは、2022年までに2.5兆円の投資が見込まれます。ブラジル政府はさらに、インフラ・エネルギー分野の世界最大級の投資計画を進めており、港湾、空港、道路、鉄道、エネルギー、鉱業分野の投資機会があります。また、ブラジルと日本の経済規模と補完性にみあう活発な貿易を取り戻したいと考えています。そのために、両国が進めてきた貿易開放プロセスに沿った経済連携協定の交渉の基礎となる影響調査を近い将来開始すべきです。

2020年は両国にとって特別な年となるでしょう。在日ブラジル人コミュニティ30周年の節目であり、彼らの貴重な貢献を称える機会です。また、リオデジャネイロから東京へと引き継がれるオリンピック・パラリンピック競技大会に声援を送る年です。政治の分野では、安倍総理のブラジル訪問が年内に予定されており、昨年来私たちが重ねてきた努力が成就する機会となるかもしれません。日伯友好の実り多き新時代を築く条件は整いました。今こそ力を合わせ、共に実現する時です。



## ブラジルを本気で楽しむ

平松佑佳子  
(会社員/ブラジル日本交流協会日本事務局)

元々、ブラジルと特別な縁があった訳ではない。高校生の時、学校行事の多言語スピーチコンテストで、同級生が披露したポルトガル語の柔らかな響きに魅力を感じたのが最初のきっかけだった。外国語を通して世界が広がっていく感覚が新鮮だった。結果、大学では興味本位でポ語とスペイン語、イタリア語の授業を履修した。専攻科目そっちのけで熱中した割にはお世辞にも身についたとは言えないが、ただただ楽しかった。

大学3年次の2003年、面白そうという軽い動機で、社団法人日本ブラジル交流協会(当時)の研修制度に応募し、翌年度の一年をサンパウロで過ごした。外国へ行くのも一人で生活するのも、言いたいことが伝えられないもどかしさも初めてで、研修先の人には迷惑をかけばななかった。「お前は何者だ」「何をしにここに来た」という容赦のない問いは、何となく面白そうだからと渡伯した当時の私にとっては中々辛いものだった。果して自分はきちんと生きてきたと言えるのかとも悩んだ。今思えば若者らしい至極青臭い内省を繰り返すうちに、日常生活のあらゆる要素が有難いことだらけなのだと思えた。辛い時に他者に救いを求めること、感謝の意を表すること、相手の目

を見て話すこと。当たり前に見えることでも真摯に行動すれば、周囲の友人達は惜しみなくそれ以上のものを返してくれた。ブラジルでの生活を通じて私は、自分にも他者にも真剣に向き合っていきたい、自身の楽しいという感覚を大切にしていきたい、そういう人間なんだな、それで良いんだ、と素直に思えるようになった。

帰国数年後から現在に至るまで、交流協会のスタッフとして、後進の研修生の事前研修(ブラジル出発前に日本でいう研修)に関わる活動を継続している。事前研修では、彼らが応募に至るきっかけや動機・目的などを掘り下げ言語化することで自己を認識してもらうような作業が多い。内面にまで踏み込むため、私たちの人間関係は割とねちっこい。人によっては忌避したいものかもしれないし、実は相対する私たちにとって難儀なことも多い。それでも、それが私たちらしさだな、というのをつい最近再認識したところだ。真剣に取り組むほど楽しさも増していく。だからこそ、これから私たちの研修制度を選んで来てくれる仲間にも、本気でブラジルを楽しんで欲しい。その一言に尽きる。

### ジャーナリストの旅路

## ブラジルの沖縄そば

佐々文子  
(NHK岐阜放送局記者、元サンパウロ支局長)

ブラジルでの特派員時代を振り返って最も印象深い取材の1つが「沖縄そば」だ。何かの雑誌の折に在サンパウロ日本総領事館の書記官が「カンボグランデには沖縄そばの屋台がずらっと並んでいて撮影すると絵になると思いますよ」と言っていたのが忘れられず調べてみると現地では沖縄そばが市の無形文化遺産になっていることや「大食い競争」に加え「歌」まで作って一生懸命PRしているというので、これは取材しなくては!と興味津々でサンパウロから北西に約1000キロ離れたカンボグランデに向かった。

取材した2011年当時、フェイラには20軒以上の沖縄そば屋が軒を連ねブラジル人の家族連れで連日賑わっていた。沖縄そばをブラジルに伝えたのは新天地の豊かな暮らしを夢見てこの地に移住した沖縄の人たちだが、それがいつしか多くのブラジル人の間にも広まっていった。

当初、店の客はみんな日本人で音を立ててそばをすするのが恥ずかしかったため、店の周りをカーテンで覆い隠れるようにして食べていたらしい。すると「日本人がおいしいものを隠れて食べている」という噂が広がり、次第に沖縄そばの存在が知られるようになっていったと、ある日系人の店主が語ってくれた。遠い異国の地でのつらい日々、沖縄からの移

住者たちの唯一の楽しみは誕生日などの祝いの席で沖縄そばを味わいながら共にふるさとの思い出を語り合うことだったという。

そして年月とともにカンボグランデに根付いた沖縄そばはブラジル人の好みに合わせて少しずつ変化を遂げ牛肉や鶏肉、もつ煮込みがトッピングされたものなど本場の沖縄で食べるものとはひと味違ったブラジル風のそばになった。

私も取材の合間に何軒も食べ歩き、具だくさんの沖縄そばを味わって、もっと仕事を頑張らなくては!と思ったことを昨日のように覚えている。ちょっと気になったのは、私が麺をすすっている隣でブラジル人の客たちがテーブルに置かれている醤油をひとまわし、ふたまわしと、たっぶり麺にかけていたことだ。

塩分の取り過ぎではないかと気が気でなかったが、沖縄から遠く離れた地で多くの人たちが思い思いにおいしそうに食べている姿を見て微笑ましく感じると同時に、ブラジル風の沖縄そばがいつしかカンボグランデの人たちにとっての故郷の味になるのだろうかと思った。カンボグランデに行かれる方、ブラジルサイズの「中」は日本の「大」か「特盛」に相当するので注文の際はご注意ください!

# セラミックアートの巨匠、フランシスコ・ブレナンを偲ぶ モダニズムとノルデスチ魂

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

昨年(2019)12月19日、ペルナンブーコにおいて独自の世界観をイメージ化したアート作品を創造してきた陶芸家フランシスコ・ブレナン（本名：フランシスコ・デ・パウラ・デ・アルメイダ・ブレナン）が亡くなった。彼は1927年生まれ故、享年92歳であった。陶芸家というよりもセラミックを主体とするマルチアーティストとしてスケールの大きな活躍をさせていただきに、地元レシーフェの新聞やTVばかりか、サンパウロやリオなどの主要紙も大きな追悼記事を掲載していた。またAFPなどの通信社も英語・フランス語・スペイン語・ドイツ語などで関連記事を配信していた。もっとも、残念ながら、ブラジルに支局を置く日本の新聞・通信社はどこも一行も報道しなかったが。

作家アリアーノ・スアスーナ（1927-2014）が旗振り役として1970年に立ち上げた「アルモリアル運動（直訳：名誉回復運動）」は、文学ばかりか舞踊、音楽、演劇、絵画、彫刻、映画などあらゆる芸術文化活動を活性化しようと目論んだ、ノルデスチ民衆文化再評価運動であったが、この中心的存在がフランシスコであった。

誤解を恐れずに“単純化”すれば、彼はヨーロッパのモダニズム精神と地元ノルデスチ魂を彼流に融合・止揚した作品世界を構築したアーティストであった。

彼の、時にエロチック、時にアブストラクトな大型陶芸作品は、レシーフェのあちこち、旧市街（「彫刻パーク」）でも連邦大学キャンパスでもポアヴィアーゼン海岸でも、見かけるので、まさに地元文化に溶け込んでいる、といつてよい。レシーフェ住民なら、彼の名前を知らなくても彼の作品は知っている。

レシーフェ住民として彼の陶芸作品に親しんでいた筆者としては、“義務として”ブレナン追悼メモを書いておきたい。

レシーフェの中心街から北の方向へ10数kmほどのところに位置するヴァルゼア地区。川沿いのあちこちに大西洋森林帯の残存といえるような木々が生い茂り、そんな自然並木に囲まれた道を20分ほど車を転がすと広大な「フランシスコ・ブレナン工房」に着く。とにかく広い（敷地面積15km）ので、ひたすら歩き回って、野外や屋内の陶芸作品群を眺めては感嘆し、タメ息をつくしかない。ここを訪れた観光客は誰しも、この壮大な陶芸テーマパークに圧倒され、感動しっぱなし症候群に陥ることになる。筆者が最後に訪問したのは3年前だったが、フランシスコのイメージネーショ

ンパワーから生み出された作品群は、タジマホールやピラミッド、チェス（盤と駒）、生物多様性を象徴する動植物（カメ、ヘビ、カエル、トカゲなど）、エロチックな女人、地元史テーマ（例えば、17世紀オランダ軍を撃退したグアラピスの闘いのシーン）等々。展示されている作品の数は2千点以上とのことだが、扱っているテーマの途方もない多様さにはただびっくりだ。

ここは元々はサトウキビ農場跡で、そこにフランシスコの父親が煉瓦・タイル工場を建て（創業1917年）、その工場が廃工場となったので、フランシスコが工房・アトリエとして再活用・再生したものだ。入口の反対側に新設されたカペーラ（小教会）は、なんとモダニズム風なので調べてみたら、なんと、あの巨匠パウロ・メンデス・ダ・ホッシャの設計だ。そう、プリツカー賞を受賞したブラジル建築界のレジェンドの作品なのだ。また工房附属のカフェでは、コーヒーばかりか地元料理も楽しめる。そう、歩いて、鑑賞して、食事も楽しめる野外アート空間が「ブレナン工房」なのである。

そんな彼のルーツについて簡単にメモしておこう。イベリア系では全くない名字（Brennand）から推測できるように、彼の祖先はイギリス人（アイリッシュ系）である。フランシスコの5代前となるエドワード・ブレナンが鉄道技師としてブラジルにやってきたのが、1820年のこと。当時、ブラジル各地でイギリスが請け負った鉄道網建設の現場で働いたものと思われるが、エドワード氏はサトウキビ農園主の娘と結婚し、ブラジルに骨をうずめることとなる。こうしてブレナン家がペルナンブーコの名門家系となり、実業の世界で地歩を固めていく。地元資本家としてのブレナンファミリーは、現在いくつかのグループに分かれているが、素材事業（セメント、ガラスなど）、エネルギー（風力発電）関連、不動産、ホテル事業など手広く事業を展開している。そんな実業家ファミリーから“はみ出た”のが、フランシスコであった。

彼が青年時代（1948年から1953年まで）フランスやスペイン、イタリアに留学できたのも、財政的余裕がファミリーにあったからであり、バリアバルセロナで、ピカソやガウディの“洗礼”を受けたおかげで、彼の芸術マインドが確立したのだ。その意味では、欧州の先進文化精神とノルデスチ精神のブレナン流カクテルがフランシスコであった。



ブレナン工房内部



ブレナン工房外観



## ボルソナーロ大統領のインド訪問： 伯大統領府プレスリリース

1月25日、伯大統領府は、ボルソナーロ大統領の訪印に関するプレスリリースを発売した。概要以下のとおり。

### 1. 合意文書署名式

(1) 「ボ」大統領は、ハイデラバード・ハウスで行われた合意文書署名式において、モディ印首相の歓迎を受けた。両国は、投資を拡大するため、また、エタノール、バイオディーゼル、バイオケロシン、バイオガス等のバイオエネルギー及び燃料の使用及び生産を強化するため、計15件の協力協定及び覚書に署名した。両国の石油・ガス開発を進めることも今般の協定の目的であった。

(2) 式典後の記者会見において、「ボ」大統領は、今般合意された15件の文書は、インドとの協力を推進する上で決定的に重要である旨述べた。

(3) モディ首相は、「両国間の戦略的パートナーシップを更に強化するため、包括的な行動計画が準備された。2023年、二国間の外交関係樹立からブラチナ婚（70周年）を迎える。自分（モディ首相）は、その頃までにこの行動計画が我々の戦略的パートナーシップ、人々の絆及び貿易協力を深化させることを確信している」と述べた。

(4) また、モディ首相は、2022～2023年に伯が国連安保理非常理事国となることに対して支持を表明し、「本日、我々

は、両国が多国間の問題について協力を更に強化することを決定した。また、我々は、国連安保理及びその他の国際機関における必要な改革のため、引き続き協働していく」と述べた。  
(5) 今般署名された合意文書は以下のとおり。

- ア 伯印間の戦略的パートナーシップを強化するための行動計画
- イ 投資協力・円滑化協定（ACFI）
- ウ サイバーセキュリティ分野における協力に係る覚書
- エ 社会保障協定
- オ バイオエネルギーの協力に係る覚書
- カ 地質学及び鉱物資源に係る覚書
- キ 保健及び医学の分野における協力に係る覚書
- ク 伝統医療及びホメオパシー分野における協力のための覚書
- ケ 幼児のための市民省間の覚書
- コ 石油・天然ガス部門の協力のための覚書
- サ 文化交流の行政プログラム（2020～2024年）
- シ 科学技術協力プログラム（2020～2023年）
- ス 刑事共助協定
- セ バイオエネルギー研究所設立のための協力に係る覚書
- ソ 畜産及び酪農生産分野における連携

2. 25日、インド大統領官邸で開かれたコヴィント印大統領主催夕食会において、「ボ」大統領は、「伯政府は、財政均衡、ビジネス環境改善及びインフラ近代化のための野心的な改革アジェンダを実施している。」と述べた。

キャンパス・コラム

## ブラジルの魔力

岡崎駿輔  
（東京外国語大学4年）

就活どうしよう、自分のしたいことは何なんだろう？ 社会に出るってどういうことなんだろうか、もっと自由でいたい、永遠に大学生でいい。これが私が大学入学後から抱いていたごくごくありふれた一介の大学生としての悩みである。事実、毎日毎日胃が痛くて、言いようもない重圧—それが社会的なものか個人的なものだったかどうかはさておき—に押しつぶされそうだった。ボサノヴァに惚れ込み、ポルトガル語を勉強したくて入学した自分の学科にさえ嫌悪感を持ち始めていた。そんな入学二年目の春だった、私が人生で初めての渡伯を経験したのは。

約30時間のフライトという苦痛に耐え、訪れた先は南伯、クリチバである。二年間勉強したポルトガル語が通じない、しかし日系人の割合が比較的高く、日本の別の町にでも越してきたかのような錯覚を覚える。不思議な町だった。町並みには日本食レストランが随所に軒を構え、公営の市場には日本食材を取りそろえた食品店が所狭しと並ぶ。言語が通じなくてもみんな理解してくれようとする。新鮮でありながらどこか懐かしい景色に胸をうたれ、空港まで迎えに来てくれたパラナ連邦大学の教授と向かった先はこじんまりとした学生寮であった。「Seja bem vindo

(=ようこそ)!!」寮生たちのその一言で私の留学生活は幕を上げたのだった。現地での生活は新しい発見の毎日だった。バスが遅れるのなんて当たり前、安くておいしい大学食堂はしょっちゅうストライキで閉鎖されるし、PT（労働者党）が集会をするときなんて生徒も教師も授業そっちのけでデモに参加する。でもみんな気にしない。「Ah mas não tem jeito,né!?! (=だってしょうがないじゃん)」ですべてが片付く。働きながら大学で学ぶ人。自分の学科に違和感を感じ何度も入学試験を受けなおす友人。自転車で安宿を渡り歩いて南米一周を目指すカップル、、、本当にいろいろな人がいた。じゃあ僕の悩みなんてせせこましいちっぽけなものに過ぎないんじゃないか、、、と次第に考え始めた。

私がブラジルでの一年間で学んだのは「Pega leve (=もっと気楽に生きようぜ)」というブラジル人が送ってくれた声なきメッセージである。どこか心の奥底で、「こうあらねばならない」と決めつけていた私をいつも落ち着かせる不思議な力を持っている。筆者の文才が全く至らず申し訳ないが、同じ事を考えた先達はきっといるはずである。

## 新刊書紹介



### ◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

#### 『ブラジル北東部港湾都市レシフェの地方文化の創造と再創造』(荒井芳廣著)

ハイチの宗教・文化の研究で知られる荒井教授がベルナンブーコ地方文化を深読みした成果をまとめた一冊。ノルデスチの基層文化を象徴するコルデル文学(民衆的小冊子)の宗教性を読み解き、社会人類学者ジルベルト・フレイレ(1900-1988)の都市社会学と劇作家アリアーノ・スアスーナ(1927-2014)の文学世界を軸に、同地方における文化運動の歴史を追っている。いくつもの事例研究をふまえた、奥深いノルデスチ民衆文化論である。

(丸善プラネット 2019年3月 238頁 3,200円+税)

#### 『ブラジルの民衆舞踊

##### パソンの文化研究』(神戸周著)

2012年にUNESCO(国連教育科学文化機関)の人類無形文化遺産として登録されたフレーヴォについての日本語による初めての本格的な研究書。一時

期活動が低迷していたフレーヴォの復興の立役者ナシメント・ド・パソ(1936-2009)が私費を投じて設立したフレーヴォ学校を人類学研究のフィールドとして詳細にリサーチした神戸教授の博士論文に加筆・修正を加えたもの。あのパワフルなフレーヴォの復興の背景を明らかにした良書だ。

(深水社 2019年12月 248頁 3,900円+税)

#### 『地図で見る ブラジルハンドブック』(O・ダベニス、F・ルオー著、中原毅志訳)

フランス人らしく全方位に目配りした百科全書的な現代ブラジルに関するデータブック。各項目のタイトルは、①ブラジルの建設、②成長と環境、③混血、④公共政策の挑戦、⑤民主主義と世界、となっており、歴史概観、経済力、資源・農業パワー、人種混血文化、貧困・格差問題、ブラジルの民主主義の問題点などについて、地図や図表・グラフと文章による、コンパクトな解説が付されている。ブラジルの多様性を再確認できる便利なハンドブック。

(原書房 2019年12月 170頁 2,800円+税)

#### 『トヨタ生産方式の海外移転手法の解析 ブラジル自動車産業』(塚田修編著)

ブラジル自動車産業の現状と固有環境

をマクロ的に概観したうえで、トヨタのブラジル現地法人がどのように技術移転を展開しているかを解明した論集。リーン生産方式移転については、その理論的背景とともに移転手法を解析している。部品サプライヤーの移転比較調査については、調査結果を分析したうえで提言も。科研費プロジェクト「グローバル化を支える技術移転の在り方に関する研究」(2013-2018)の研究結果をまとめた一冊だ。

(白桃書房 2019年7月 188頁 2,700円+税)

#### 『Mensagem dos deuses 神々のメッセンジャー』(新多正典写真集)

レシーフェ市のピーナ地区を本拠とするマラカトゥ集団「ナサオン・ポルトヒコ」を毎年取材してきた新多カメラマンの写真集第二弾。ここに記録された2019年2月のカーニバルのテーマは「エシュー」だった。エシューとはカンドンブレの神々(オリシャー)のメッセンジャーであり、神々と人間の間に彷徨し、人間どもの願い事をオリシャーへ届けるのが「生業」だ。アフリカ系住民たちのフォークロアにして文化表現が見事に記録されている。

(2019年12月 64頁 300部限定出版)

## !!「ブラジルあれこれ」!!

### FIOCRUZ 薬物使用状況調査

グローボ社インターネット・ニュースサイトであるG1の「2019年の回顧(科学技術分野)」は、2019年5月の政府によるFIOCRUZ(野口英世博士とゆかりのあるオズワルド・クルス財団)が実施したブラジル人の薬物使用状況調査(III Levantamento Nacional sobre o Uso de Drogas pela População Brasileira)の結果公表を禁止する措置(その後2019年8月に解除)を取り上げた。

政府の説明では、FIOCRUZの調査は、入札公示書(Edital)の仕様条件を満たしていないため公表禁止にしたというものであったが、FIOCRUZ側は、調査は、調査の仕様書に基づき科学的な方法によって正しく実施された旨反論、当時国会で薬物対策の強化を目指した政府の法案が審議されていた状況の中、様々な憶測を生んだ。

ブラジル人の薬物使用に関する現状に関し、調査は、「ブラジルにおいて薬物使用が蔓延している状況(Epidemia)はない。」と結論したからである。具体的な数字として、12歳から75歳のブラジル人のうち9.9%が不法薬物を使用したことがある、7.7%が大麻、ハッシシを、3.1%がコカインを使用したことがあると回答したことを挙げている。この結論に対し、政府側は、「FIOCRUZは、薬物の自由化を目指している(オズマール・テラ市民相)」など極端な反論をするものまで現れたが、学界では、FIOCRUZの調査手法を擁護する意見が目立った。

G1によれば、FIOCRUZの調査は、2014年から2017年にかけて、16000人を対象に行われ、調査に携わった者は、フィールド調査員、疫学者、統計士など様々な分野の500人に上った。また、調査実施にあたり、法務省から700万レアルの補助金を受けている。

一方、政府の薬物対策強化法案は、6月に国会を通過し、大統領の裁可を得た。その中でも、薬物使用常習者に対する対策強化として、これまでの対症療法的アプローチ(Redução de Danos)を廃止し、薬物からの隔離による治療という基本的方針の下、自己意思に反する入院(Internação Involuntária)とCT(Comunidade Terapêutica)と呼ばれる民間の宗教団体等が運営する治療施設の強化を組み合わせた施策を打ち出したことから関係者の間に懸念が広がった。というのも、このようなやり方は、これまででも暴力の使用等による人権侵害につながってきたからである。特にCTは、基本的に慈善施設であり、医師や専門家による管理もなされていないので人権侵害につながる可能性が高いといわれる。

確かに、リオやサンパウロといった大都市を中心にクラコランジア(Cracolandia)のような場所があり、白昼堂々と薬物を使用している光景は、ショッキングなものではあるが、実効性のある施策のためには、拙速を避け、せつかくの調査の結果を十分に考慮することが望まれる。(MK)

## 日本ブラジル中央協会 — イベントのご案内 & お知らせ —

### 楽しく学ぼう! 学んで話せるポルトガル語 春期ポルトガル語講座 受講生募集中!

お申込みはこちらから <http://nipo-brasil.org/portugal/>

#### 《募集コース》

- 全員の初心者(16:30)コース [毎週 火曜日] 16:30 ~ 18:30 (4/7 ~ 7/7 全13回)
- 全員の初心者(19:00)コース [毎週 火曜日] 19:00 ~ 21:00 (4/7 ~ 7/7 全13回)
- 初級Ⅰコース [毎週金曜日] 19:00 ~ 21:00 (4/10 ~ 7/10 全13回)
- 初級Ⅱコース [毎週水曜日] 19:00 ~ 21:00 (4/8 ~ 7/8 全12回)
- 中級コース [毎週月曜日] 19:00 ~ 21:00 (4/6 ~ 7/6 全13回)
- 上級(月曜)コース [毎週月曜日] 19:00 ~ 21:00 (4/6 ~ 7/6 全13回)
- 上級(木曜)コース [毎週木曜日] 19:00 ~ 21:00 (4/9 ~ 7/9 全13回)
- 上級会話コース [隔週土曜日] 11:00 ~ 13:00 (4/11 ~ 7/4 全7回)

詳細はホームページをご参照下さい。受付はホームページからお申込み、受講料のお振込み順とさせていただきますので、お早めをお願い致します。

イベントのご案内 HPの申込みフォームからお申し込み下さい。

#### 3/24 長谷川勝彦 日東珈琲株式会社(Cafe Paulista)社長 ランチョン・ミーティング

日時: 2020年3月24日(火)12:00~14:00  
場所: シーボニア・メンズクラブ  
住所: 千代田区内幸町2-1-4 日比谷中日ビル1F  
参加費: 会員 3,000円、非会員 3,500円

#### 4/10 八木繁和 ブラジルYKK農場 初代農場長 ランチョン・ミーティング

日時: 2020年4月10日(金)12:00~14:00  
場所: シーボニア・メンズクラブ  
住所: 千代田区内幸町2-1-4 日比谷中日ビル1F

法人・個人・学生 皆様のご入会を心よりお待ちしております

### 新規会員募集中

会員数 法人会員 130社  
(2020年2月現在) 個人会員 約400名

当協会の活動目的「日本・ブラジル両国間の相互理解、友好関係の促進に寄与する」にご賛同・ご支援頂ける方に、会員となることをご検討いただければ幸いです。

#### 会員特典

1. 協会会報「ブラジル特報」の無料配布  
隔月発行、年6回配布。
2. 会員価格にて、講演会等のイベント、ポルトガル語講座に、参加できます(会員限定イベントへも参加いただけます)
3. 会員交流懇親会へ参加いただけます
4. ホームページにて、会員限定情報をご覧いただけます

#### 年会費

法人会員 1口 20,000円 / 個人会員 1口 10,000円  
(2口以上) (1口以上)

※入会金は不要です

#### お申し込み



《日本ブラジル中央協会公式HP》  
<http://www.nipo-brasil.org>

日本ブラジル中央協会 検索

「ブラジル特報」は一部有名書店の店頭でも入手できます。



# 鎌倉にColoridasのNEW SHOPがオープン!!

## NEW SHOP OPEN!



ビオジュエリー他、ブラジルのフォークアートやファッションなど、オリジナルアイテムをお楽しみいただけるお店です。  
鎌倉駅西口の御成町商店街にあり周辺は今鎌倉でも注目のお店が増えている人気エリアです。是非、お散歩がてらご来店いただけましたら幸いです。  
尚、青山店は Coloridas Atelier Shop として毎週土曜日にアトリエにてオープンいたします。今後とも Coloridas をどうぞよろしくお願いたします。



**gilsonmartins**  
Rio de Janeiro

ユーモアと品質を兼ね備えたブラジルデザイン「ジルソンマルティンス」リオ・デ・ジャネイロより

**SOBRAL OSKLEN**  
3月中旬入荷予定

WEB SHOP <http://shop.coloridas.jp>  
Instagram coloridas\_brasil\_tokyo

## coloridas Aoyama / Atelier Shop

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 3-42-11 ローザビアンカ 201  
コロリダス株式会社  
TEL. 050-5585-1090 mail. bio@coloridas.jp



# TRADE & DEVELOPMENT BANK

## モンゴル貿易開発銀行東京駐在員事務所

# “蒼天よりも高く”

突き抜けるような雲ひとつない青い空 — 蒼天(そうてん)  
モンゴルは蒼天の国です。そのモンゴルでリーディングバンクとして活躍している銀行がTDBです。日本とモンゴルの間の貿易・投資に関わる貿易金融や外国為替を取り扱っています。私たち東京駐在員事務所はモンゴルの蒼天につながる日本の玄関口です。日本のお客様からのご相談をお待ち申し上げております。

# ブラジル赴任の前に ビジネスで使えるポルトガル語を



ブラジルでビジネスや生活をする上で  
欠かせないのがポルトガル語です。  
BrAsia(ブレイジア)では、  
赴任前と赴任後の語学研修を提供します。  
「講師任せにはしない」  
現地に精通したスタッフが進捗を管理します。

**BrAsia**(ブレイジア) 運営:株式会社 漢和塾 〒104-0061 東京都中央区銀座1-14-12 楠本第17ビル5階  
TEL03-6263-0716

お問い合わせは E-mail: [brasia@kanwajuku.com](mailto:brasia@kanwajuku.com) HP: <http://brasia-j.com/>



## モンゴル貿易開発銀行東京駐在員事務所

〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-4-1  
丸の内永楽ビル2303  
TEL: 03-4588-3945  
FAX: 03-4588-3947

<http://tdbm.jp/>

詳しくはコチラ→



●最寄り駅:東京メトロ東西線大手町駅B1出口直上



